

障害者が狙われて



表題は朝日新聞 2 月 25 日朝刊「対×談」。リードから一相模原市の障害者施設で重度障害者を狙い、19 人を殺害したとして植松聖容疑者 (27) が殺人罪などで起訴された。脳性まひの障害で車いす生活を送る東京大学准教授の熊谷晋一郎さんと、ダウン症の娘と暮らしている和光大学名誉教授の最首悟さんが、事件が社会に投げかけたものを語り合った。

こころに迫る指摘が多いが、最初と最後だけでも紹介しておきたい。

熊谷 衝撃だったことは二つあります。事件を起こした植松容疑者が「障害者は生きている価値がない」と述べたとされること。障害者を知らない人ではなく、施設で働く介助経験者が起こした事件だったことです。介助者と障害者の間には抜き差しならない関係があります。「暴力」の問題です。脳性まひという障害を持つ私は幼いころ、リハビリを補助する専門家が寝たきりの友人を足で踏む姿を見たことがあります。以来、ときおり介助者に「熱湯をかけられないか」「こっそりつねられないか」と潜在的な恐怖心を抱いてきました。2000 年以降は制度が整備され、多くの人が介助の世界に入ってきてくれるようになりました。相模原の事件の後には介助をしてもらっている瞬間にふと、「なぜ、この人は私の背中を洗っているのだろう」と感じるようになりました。「暴力が起きるかもしれない」という不安のふたが開いたと感じました。

最首 「生産しない者には価値がない」という容疑者の考え方は、経済主導の国家がはらむ問題に通じます。だから驚天動地の事件ではなく、「来たるべきものが来た」と感じました。これまでの社会は「いかに生産するか」でした。団塊の世代がすべて 75 歳以上になる 2025 年には、認知症患者が全国で約 700 万人になる見込みです。働いて社会を支える人が少なくなり、生産する能力がない人に社会資源を注ぎ続ける余力がなくなる。そのとき、生産しない人たちを社会はどう扱うのか、いよいよ問いを突きつけられている。これからの社会が、とてつもなく非人間的なものになるか、人間的なものになるのかという分岐点なのです。……

最首 「人間」というものを切実に考える必要が求められる時代になってきました。「自立して強くあれ」ということから変えていかなければいけない。「弱さの強さ」を自覚する必要があります。そして、これを世界に発信しなければならない。

熊谷 暴力の加害者にも被害者にもなりやすいのは、孤立し、頼れる先の少ない人です。社会が暴力を引き起こすという前提を共有し、障害の有無を超え、すべての人たちがたくさんの相手に頼れる社会にしていかなければならないと思います。

(2017 年 3 月 4 日)